タラスクス～朝の病名～? - 2

鳥海きりう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
タラスクス～朝の病名～？-２

【Ｎコード】
Ｎ８７８７Ｐ

【作者名】
鳥海きりう

【あらすじ】
その夜は唐突に始まった。襲い来る殺人機械の群れ。炸裂する閃光。迸る雷。ついに姿を現したヴィーブルの前に、レギン魔導師団はなす術も無く崩壊し、レギンも敵中で戦意を喪失する。重傷を負った小衣を抱き、朝は憎むべき闇に向かって叫ぶ。「殺してやる！」

?．もしあなたが「誰かに自分の話を聞いて欲しい」と思ったら

†

その廃墟の敷地面積は、意外と大きかった。
夜の森を歩くうち、最初の門が私達の前に現れたのだが、本館はまだずっと先に小さく佇んでいる。「第一関門、か」
「長いな。ちんたら歩いてたら夜明けまでにスタート地点に着けないぞ」
「でも、考え無しに急ぐわけにもいかないわよ。どんな罠があるかも知れないし」
「いっそタラスクスで乗り込んでいくってのはどうだ」
「いや、それをやるとね。後々フィスタあたりがうるさいのよ。俺らの苦労を無駄にしやがって、みたいなね」
――こういう時は先頭に露払いを立て、障害を取り除きながら進むのが常道だ。露払いの腕が良ければ、それほど進軍速度も落とさずに済む。
「というわけで、春日さん、ＧＯ」
「…えええ！？　私ですかぁ！？」
「貴女が一番適任でしょ。貴女たぶん、この三人で殴り合いやったら一番強いわよ？」
「何しろ泣く子も殴る恐怖のヴォーディガン魔拳士団だからな」
「泣く子を殴ったりしません！」
「私も司も鼻は利くけど、何か出てきた時に一番対処が速いのは貴女なのよ」
「はあ…」
「経験が無いわけじゃないんでしょ？　それともヴォーディガン某じゃ、ポイントマンの育成はやってないの？」
「…わかりました。行きますよ。もう」

わかりやすいため息を吐き、小衣はのろくさと前へ進み出た。「あーあ」「やれやれ」「行くのかよ」「何で行くんだよ」「明日でいいだろ明日で」「ていうか夜まで休憩じゃねーのかよ」「靴汚れるしな」「朝、お前行けよ」「何でよ」「お前ら、つべこべ言わずに歩け！　最後になった奴は合流地点で最前列に回してやる！」

「いやー、思い出すなあ」

「何を、何に」

「あの哀愁漂う背中がさ、昔の仲間に似てんのよ」

「やらせてんのはお前だろ」

もっともだが、それでも頬が緩む。

今は亡き亡霊達が、彼女の背中から語りかけてくる。「ほら見ろ。靴が汚れちまった」「俺なんか昼飯食いっぱぐれたぞ」「だから今日行くのはよそうって言ったんだ」「朝、何でお前は来ないんだよ」「早く来いよ。皆待ってるぜ」

「…無理だよ。私まだ仕事があるもん」

「何？」

「ああ、ごめん。独り言」

そういう間にも小衣は門とその周辺を調べ、やがて私達に手招きした。大丈夫らしい。私と司は小衣の方へ歩き出す。

「…で、何かいそう？」

「信用してやれや。いい奴じゃないか」

「念のためよ」

「…開けます」

私達が近づくと、小衣がそう言って錆びついた門に手をかけた。

と――。

「「「――」」」

錆びた鉄が軋む音を立てて、門が開いた。

小衣が手をかけた瞬間、ひとりでに。「…おい、何も無いんじゃなかったのか」

「そ、いや、そんなはず――」

「――ちょっと待って」
私は門をくぐり、その端の壁の裏を覗き込んだ。――履帯がある。微かな駆動音。もともと自動で開く門だったのだ。
――ただ、じゃあ何がきっかけでこの門は開いた？「小衣さん」
「何も無いんだよね？」
「はい！　門自体にも、周辺にも、何も――」
「――」
門を触ったから開いたわけじゃない。センサーの類もあれば小衣が見つけるはず。よって無い。後は――
私は前へ向き直り、まだ遠くにある古城を睨んだ。「…野郎」
「二人とも。もういい。走ろう」
「え！？」
「…大丈夫なのか」
「敵が大丈夫だと思ってるうちは大丈夫よ。――だから、大丈夫じゃないと思わせないと状況は動かない」
「――え？」
「――おい待て。それは」
「置いてくよ」
走る。「あ、ちょ！」「おい朝！　逸るな！」敵はずっと私達を見ている。あの門は戦時中の遺物だ。だが、壊れていたわけじゃない。壊れていた門だけ直して、センサーは直せなかったわけじゃない。修理の跡が無かった。
門は残して、センサーだけ壊したのだ。異常者だ。あるいは頭が良すぎて、自分の神経が異常なことに気づいていない健常者か。
何とかして相手の余裕を引っぺがして、同じリングに立たせないと――勝負にならないかもしれない。私でも。「っ！？」足がもつれた。
地面が揺れている。地震。立っていられないほどの地震。
「ほれ見ろ！」「朝さん！　何踏んだんですか！？」いつの間にか朝さん呼ばわりになってるし。

「あーしーたーさん！　退きましょう！」
「黙って！」
「おい朝！　少し落ち着け！」
「…揺れが近づいてる」
「え？」「何？」
「自然な地震じゃない。断続的に続いてるから竜の足音でもない。地下から――どっち――下から上――？」
「…え？　朝さん？」
「…何か言ってやがる」
「揺れが一定してる――ボール音も聞こえないから、地中潜行兵器じゃない――駆動音？　リフト？」
「何？　何言ってるんですか？」
「おい朝。俺達にも聞こえるように喋れ」
「結構大きい――速度からするとそんなに軽くない。方向は――二つ？　一時と十一時？」
　正面からの敵襲を想定した場合、その位置に配置すべき兵器は――「二人とも！　全速で移動再開！」
「は！？」
「何言ってんだお前！？」
　言われる間に私は走り出す。悪いけど待ってる暇は無い。「早く！　逃げたほうが危ない！　一時と十一時方向に対地自動迎撃砲塔二門！」
「え」「な」
　二人が何か言いかけ、周囲に風が吹き荒れた。揺れる闇のどこかでハッチが開き、押し出された風が奇声を上げる。
　現れたそれは巨大な塔だった。しかし、そこに点る光は窓ではない。銃眼と索敵灯、そして薄赤い照準光。
　それらの光が二人へ集まり始めるのとほぼ同時に、二人も状況を察して走り出した。「ほらビンゴ！」
「ビンゴじゃねえ！　お前が出したんだろうが！」

「違う！　敵が出したんだよ！　敵は私達が慌てるのを見て愉しんでる！」
「じゃあどうすんだよ！？」
「とにかく前進して、砲の射程外に出る！　あれは外の敵を迎撃するものだから、中に入れば撃ってこない！」
「分かんのかそんなもん！」
「嫌ならあんたが何とかしろ！」
「分かりました」
「「え！？」」
小衣が走るのを止め、後ろを振り返った。標的を探す無数の光が、人間では不可能な速度で小衣に近づいてくる。「あれが対竜機兵用なら、このまま走ってても逃げられません。いずれ捕捉されます。先に行ってください。あれは私が何とかします」
「な――何言ってんだ！？　戻れ！」
「私もヴォーディガン魔拳士団の一員です。あの程度の自動兵器一基なら、どうにか出来ます」
「…二基あるよ？」
「…やるだけやります。行ってください」
「…」
小衣の隣に立つ。「…ごめん」
「いいんです。これでいいんです」
「ううん。違う」
「？」
「昔の私だったら、貴女を置いて行ったと思う。自分がそういう風に使われたから。――でも、そうじゃないんだね。そうじゃなかったんだ」
いつもは気さくだった指揮官の、信じられないほど非情な命令。全員が命からがら逃げている時に、一人だけ残って敵の攻撃の楯になれ。仲間だと思っていた人達も、誰も庇ってくれない。殺してやろうかと思った。あんたらそのためにずっと、私に媚売ってたのか。

いつか来る今日みたいな日に、私を弾除けにするために。
――でも、そうじゃなかった。自分がその側に立ってみて分かった。
自ら楯になると。この命で貴女を守り、この拳で貴女が進む時間を稼ぐと言った彼女の――
なんと頼りなかったこと。「…左は私が殺る。右は任せていい？」
「…はい」
「なるべく離れて戦ってね。近くにいると踏んじゃうかもしれないから。あと、敵の砲が多いから、流れ弾には注意すること」
「…私のこと、素人だと思ってません？」
「私に比べりゃ、あんたなんてど素人以下よ」
「じゃあ、そっちが気をつけてください」
「…お説ごもっとも」
殺意を秘めた機械の光が、近づいてくる。「敵の攻撃と同時に散開。各個に撃破」
「了解」
「焦らず、冷静に。とっておきはまだ出さないでね。ここは前哨戦なんだから」
「了解です」
砲火が狂気の叫びを上げ、私と小衣は左右に跳んだ。
私は胸からペンダントにしてある紅い宝玉を取り出す。竜石。私の意思をタラスクスに伝えるサブ・インターフェースであり、竜の動力炉であり、タラスクスを瞬間移動させて私のところまで来させることもできる。質量転移炉、というらしい。
「…タラスクス」
念を集中するために、竜石を額にかざした時――
耳が聞こえなくなるほどの爆音と共に、視界がオレンジ色に染まった。「…え！？」
後ろを振り返る。小衣に任せた砲塔が、半ばほどで大爆発を起

こしていた。「うわ！」二度、三度。立て続けに爆発が続く。威力もさることながら狙いも的確で、敵の砲を最も効率よく潰せる位置で爆発が起こっている。
――四度目の爆発で、砲塔は完全に半ばから折れた。「…すご」私が思わず感心するのも束の間、
「！？」
光。
突然巨大な光が発生し、私の視界は完全に奪われた。それが巨大な落雷だと気づき、私が目を開けたとき、砲塔は完全に崩壊し、後には黒く焼け焦げた残骸が残るばかりだった。「……小衣？　小衣さん？」
「はぁーい……」
ああ、良かった。まだそんなに離れてなかったらしい。私は声がした方に向かう。「小衣？　どこ？」
「こ、ここです…」
小衣は私のすぐ足元に尻餅をついていた。「…小衣さん」「は、はい？」
「貴女って、もしかして、ヴォーディガン魔拳士団でも結構上の方？」
「ち、違いますよ。むしろ今年入ったぐらいで」
「今年！？　そりゃ頼りないはずだわ――」
私は思わず呟き、崩れてもまだ巨大な黒い残骸を見やる。「――じゃあ、さっきの情け容赦の無い魔法コンボは、貴女じゃないのね？」
「ち、違いますよ。あんな魔法が使えたら魔拳士団じゃなくて――あ！」
「何？」
「レギン様！　レギン様ですよ多分！　対岸から私達を支援してくださったんです！」
「…！」

私は思わず湖のほうを見やった。
いや、睨みつけた。「…そういうことか」レギンとフィスタは、もとより私が邪魔になる心配などしてなかった。それどころか、始めから尻馬に乗るつもりだったのだ。
フィスタが担当する予定だった突入班の役を、私達三人にやらせたのだ。「…朝さん？」「…何でもない。行こう。私の目的は変わらない」私は尻餅をついている小衣を助け起こし、後ろを振り返った。まだ爆発は続いている。もう一基の砲塔の各所で爆発が起こり、砲塔はその頂上部から折畳式のレールを展開させ、それを湖の対岸へ伸ばしていた。ＬＬＬＣ―《長射程長砲身電磁加速砲》。直撃を受ければタラスクスでも撃ち抜かれる。レギンの本陣など一発で吹き飛んでしまうだろう。
どうなるのかちょっと興味もあるが――あえて気にしないことにした。「さあ、小衣、行くよ」
「え――いいんですか？」
「私達に突入班をやらせたんだとすれば、敵がそれに反撃してきた時点でレギンの潜入班が敵陣に侵入してるはず。見て」
私は小爆発を起こしながらも、砲の発射準備を続ける砲塔を指差す。「さっきより時間がかかってる。きっとレギンがいないからだよ」
「あ――」
「行こう。ぐずぐずしてると乗り遅れるよ」
レギンにはやらせない。フィスタなんてもっての外だ。あれは私の獲物だ。敗北した奴等の嘆きと断末魔の叫びだけが、渇いた私の心を潤す水であり、天国のママに捧げる歌になるのだ。私は神には祈らないが、ママにも祈らない。怖くて祈れない。だから奴等に祈らせる。その断末魔の叫びを以って、自らの罪を自覚させ、力不足を悔いさせ、未来永劫その魂を以って贖罪することを誓わせるのだ。
「誰の罪を、かな？」
「――何？」

「怖くて祈れない、と言ったね？　それに君の論理からいけば、あの竜達はどんなに罪を悔いたところで許されない。どのみち許されない者にいちいち許しを請わせるのは時間の無駄だと思わないか？」
「――うるさい」
「君は本当は、許して欲しいんじゃないのか？　――自分自身を」
「うるさい！」
「あ、朝さん！　速いです！」
小衣の手を引き私は走る。徐々に高まる戦意と憎悪を連れて、まっすぐ敵の牙城を目指す。
行く手の道は暗かったが、背後で爆発が起きる度、明るくなった。

†

城門は開いていたが、その先の竜が通れるほどの大扉は閉まっていた。真面目に開けていたら五分はかかる。「小衣、突破して！」
「はい！」
それまで私に手を引かれて走っていた小衣が、自分の重さを忘れたように加速して私の前に出た。本気を出すとあれくらい速く走れるらしい。
…私に手を引かれるフリをして、体力を温存していたのだろうか。「ホーライ・カノン！」
巨大な扉が左右同時に元の位置から外れ、城内に吹き飛ぶ。私はそれを追うように城内に駆け込み、扉のあった位置に着地した小衣が続いて駆け込んでくる。
私達が左右に飛んだと同時に、門を機銃の一斉射が破壊した。
「――小衣？　生きてる？」
「はーい…」
一瞬にして瓦礫塗れになった古城のエントランス。硝煙と火薬の匂いの向こうから、小衣のいまいち頼りない声が聞こえた。「もう

……何なんですか、これ。戦争って終わったんじゃないんですか？」
「…もう、ちょっと魔法をかじったただの詐欺師って線は消えたわね」
外ではまだ戦闘が続いている。私達が通るそばから無人の砲台や攻撃機が飛び出し、静かな夜の湖畔は戦場と化した。出てきた兵器のほとんどはレギンの本陣に向けられたが、私達を狙ってくるものも若干いて、その若干が私達にとっては死活問題なわけで。「これだけの戦力、個人じゃ用意できないわ。これはテロよ。ここにいる奴は、本気でこの国を敵に回す気なんだわ」
「…レギン様たちも、それが分かってたんでしょうか？」
「さあね。それより問題は――」
「――？　何です？」
問題は、それをどこの国が支援しているかだ。そして、どうしてこの時期に行動を起こしたのか。「小衣さん」「はい？」
「ヴォーディガン魔拳士団って、技の名前叫ぶの？」
「…い、いいじゃないですか。発声は拳法の基本なんですよ」
「ホーライ何とかって何。蓬莱砲？」
「三女神の輪唱《ホーライ・カノン》です。加速魔法と滞空魔法を併用して、最初の跳び蹴りで門の蝶番を破壊して、次の後ろ回し蹴りで片方の門、次の逆脚の蹴込みで反対側の門を吹き飛ばす、っていう一連のモーションをほぼ同時にやるんです」
「…技はいいんだけど、その名前をフィスタが考えて、部下達に教えてるの？　うええ」
「いいえ。今思いつきました」
「…今？　今って今？　貴女が？」
「はい。いや、普通に火炎魔法とかで壊す技もあるんですけど、それだと朝さんが熱いじゃないですか。だから脚力だけで壊すしかないんだけど、もし通路が小さくて朝さんが手間取ったらそれもまずいなと思って」
「…」

小衣はそこでにやりと笑い、ガッツポーズした。「これぞ我が必殺魔拳が一つ」
「…まあいいや。行こ」
「ま、まあいいや！？　何ですかそのリアクション！？　せっかく今私かっこよかったのに！」
「そのかっこよさは女の子が追求するものじゃない」
これがフィスタのスパルタの成果なのだろうか。それともこの可愛い女の子が生まれ持ってしまった才能なのだろうか。それはきっと、こんないい娘が追求するべきものじゃないのに。
――いや、あるいは、もっと別のものなのかもしれない。「…それで朝さん、どうします？」
「…どーしよっか」
こういうケースではまず、敵の退路を断つのが最優先だ。せっかく居場所が分かって踏み込んだのに、逃げられましたじゃ話にならない。まあそれはレギンがやっているだろう。後はどうにかして逃げたい犯人がどこへ行くのか予測する。頭の悪い犯人なら何とか外に出ようとして屋上あたりに出て詰んでしまうのがパターンなんだけど、こういう古城は往々にして秘密の抜け道、なんてものがあるもんだから
――ん？　私何しに来たんだっけ？　「…あ、そうだ」
「はい？　何です？」
「地下よ。もちろん地下」
「…わ、わかるんですか？」
「もちろん」
「や、やっぱりすごいですね。朝さんぐらいの英雄だと、分かっちゃうんですねそういうの」
「ん？　いや、敵の居場所は分かんないよ？」
「え？　じゃあ何が分かったんですか？」
「だって、ここより上に竜を隠しておけるスペースは無いじゃない」
「…ああ」

そう、竜を殺しに来たんだった。もしまだ地下ドックとかで寝こけてるんだったら儲けもの。じっくりことこと料理してやる。もしいないんだったら――帰ろう。竜もいないこんなボロ城に用は無い。
「やっぱり、それが優先なんですね」
「当然。嫌なら小衣だけレギンに合流すれば？」
「――いいです。一応任務ですし。――それに」
「何？」
「私見たこと無いんで、一度見ておきたいんです。本物の竜を」
「…ほう」
「あ、個人的興味じゃないですよ？　ヴォーディガン魔拳士団の一員として、後学のために、見ておきたいんです。あくまで」
「そんなに見たいなら今度ウチに来れば？　研修とかで」
「いいんですか！？」
「うん。野良竜なんかじゃなくて、最先端の竜機兵の組織戦――神弥竜機士団を見せてあげる」
「ほんとに！？　やった！」
「見料一〇，〇〇〇ドラクで」
「…お金取るんですか」
「お食事とご宿泊は別料金ね」
「せっかく友情が芽生えたと思ったのに――あ、それヴォーディガン魔拳士団に請求してもらっていいですか？」
「やだよ。私のポッケに入れるんだから」
「さらりと不正を暴露しましたね」
私はエントランスの中央にある大階段――ではなく、その後ろにある扉を見やる。おそらくあれが地下への入り口だろう。「じゃ、行こうか」「はい」小衣とともに扉へ走る。たぶん小衣も気づいているだろう。
これだけ隙だらけに無駄話しているのに、敵が迎撃に出てこない。それどころか人気が感じられない。
――もう逃げられた、わけじゃないだろう。何かある。

「――待ってください」
小衣が私を制止し、扉の前に立つ。「…」「…気配は無い、ね」
「…どうでしょう」呟いた小衣がぼそぼそと何か呟き、その指が宙に印を描いた。透視魔法。
小衣を中心に黒い魔法陣が出現し、一文字ずつ時計回りに古代文字が浮かび上がる。「…？」小衣があれ？　というふうに首を傾げる。「間違えた…？」小さい呟き。
透視魔法じゃ――ない！　「致死魔法！　小衣どいて！」
私は小衣を押し退け扉を蹴破った。一度かけられてしまったら、致死魔法は取り消すことも跳ね返すことも出来ない。術が発動する前に、術者を殺す――！
しかし、扉を開けた私の目の前にあったのは、敵の魔導師の姿ではなく、無数の氷の槍だった。「！」風を切る微かな音。前触れも無く飛んできたそれらを身を捻って避ける。「朝さん！」脇腹を通り抜けた冷気。瞬時にそれが熱に変わる。己の血の匂い。走りながら護身用のナイフを引き抜く。数秒も待たず、耐え難い痛みが私を襲うだろう。正面に人の気配。泡を食っている魔導師達にナイフを振りかざす。「どれ！？」一人が前にかざしていた手首を切りつけ、叫んだ。魔導師共を切り裂き、かき分けながら、致死魔法を使っている奴を探す。泡を食いながらも反撃しようとしている奴は違う。そいつは致死魔法で手一杯で、反撃なんて出来ないだろうから――
逃げようとするはず。「お前か！」魔導師達の中に一人だけ、後退する素振りを見せる者がいた。そいつにナイフを投げつける。そいつは手を軽く振り、ナイフは宙に出現した氷の盾によって弾かれた。できる。今のは空気中の水分を凍らせる初級氷魔法の応用だろうが、それにしてもこのスピードでできるなんて。
「朝さん！」
後ろから声がして、周囲の魔導師達が一瞬で吹き飛んだ。「援護します！」「うん！」振り向いている暇は無い。短く答え、私は正

面の奴との距離を詰める。ナイフは無い。殺せないなら、何とかして術の進行を止める。狙うべきは印を描く腕か、呪文を唱える頭――と相手も思っているだろう。そこを狙うと見せかけて脚払いから投げ。これで行こう。

戦術がまとまったところで、敵との距離がゼロになった。「口を閉じろ！」言いながら敵の顔めがけて拳を打ち込む。「ま、待ってくれ！」敵はそれを腕で払い、私はその勢いで一回転する。裏拳。「え？」

訊き返した時には、私の拳に鈍い感触が伝わってきていた。「っ…」「…？」魔導師は私の裏拳を食らった勢いで壁に手をつき、頬を庇いながら荒い息を吐いた。黒衣の魔導師。黒衣。その黒衣には見覚えがある。うなじの下あたりにつけられた正七角形の印は、王を守る七つの剣を表し、衣の色が纏う者の血統を表す。レギン家は黒。夢想の黒外套《マント》。「…レギン？」

「遅いよ、神弥卿…」

レギンはさすがに恨めしげに呟く。「何でこんなところに出て来るんだ、間の悪い…」「あんたこそ、仕掛ける前に私だと分からなかったの？　透視魔法とかで」「こんな暗さで見えるわけ無いだろ」

「あ、そうだ。小衣？」

「おい神弥卿。次に進む前にごめんなさいとか言わないのか」

毒づくレギンを尻目に後ろを振り返る。「はい？」何をどうやったのか、小衣は累々と横たわる魔導師達の中央にぽつんと立っていた。――いくら接近戦とはいえ。いくら狭い場所での戦闘とはいえ。

「レギン。あんたの軍はもうちょっと接近戦の訓練増やしたほうがいいわよ」

「いや、だから――ああもういい。謝罪も要求しないし言い訳もしない。皆起きろ！　仕事に戻るぞ！」

レギンが命じると、倒れていた魔導師達が起き上がり、隊列を組みなおし始めた。

「わ、わ」

「小衣、こっちこっち」
呼んで手招きすると、小衣がこちらに駆けてきた。「え、えーと……申し訳ありません、レギン閣下」
「…？　君は――確かフィスタの」
「はい。主命により、神弥卿の監視をしておりました――あれ？　主から何も聞かれてませんか？」
「ああ。何も聞いてないな。――神弥卿。そもそも君は何でこんなところにいるんだ？」
「え？」
私は思わず訊き返し、レギンの顔をまじまじと見つめた。きょとんとしてやがる。ほんとに私が来ると思ってなかったのか、来るかもしれないとも思わなかったのか、たぶん来ると察することも出来なかったのか、てことはあんたよりフィスタのほうが私のことをよく分かってるとでも言うのか――とか、色々な思考が頭を埋め尽くしたがどれも言葉にはならず、私は代わりにため息を一つ吐いた。
「…レギン。あんたって人は」
「？　僕が何なんだ？」
「もういい。――小衣。行こ」
「え。え？」
脱力した私はレギンから離れて歩き出す。「あ、朝さん？」傍らを通り過ぎる時、小衣がおずおずと声をかけてくる。まったくどうして私の周りには、こういう今一つ違う男しかいないんだろう。
――ん？　そういえば何か忘れてる？　「あ、そうだ」振り返る。
「レギン？」
「…何かな」
「あんた達、地下から来たの？」
「？　ああ。こういう時は下から退路を断ちながら攻めるのが基本だからね」
「竜とかいなかった？」

「……いや。そういえばいなかったな」
「ほんとに？　地下ドックとかも無かった？」
「ああ。あったという報告は受けてないな」
「…ふうん」
私は正面に向き直り、呟く。「つまんないの」
「神弥卿」
「朝さん」
二人から同時に、同じような刺の入った声で呼ばれた。

†

「…あ。服に血が散ってる。最悪」
「え？　朝さん、それ私服なんですか？」
「私服っていうか、私のは全部オーダーメイドよ」
「えー！？　…やっぱり騎士様は違うんですね」
「いや、だって私達って制服みたいなの無いもの。だけどまさか私服で御前会議とかに出るわけにもいかないから、結局自腹で用意するしかないのよ」
「公費とかで落ちないんですか？」
「公費で落としたら経費節減の対象になるじゃない。貴女私にＯＬみたいな格好で他の騎士の前に出ろって言うの？」
「あー……それは無理ですね」
「でしょ？」
「ていうか、私はそれでもいいですけど、朝さんが無理そうなのは分かります」
「――そこの女子二人はもっと緊張感持ってくれないか！？」
私は叫んで振り返ったレギンを指差す。「ほら。たぶんレギンも特注品よ」
「そうですか？　結構どこにでもありそうですけど」
「作戦中に服の話で盛り上がるな！　あとうるさいから私語を慎め

！」
「今はあんたのがうるさいわよ」
「就業態度を問題にしてるんだ！」
「就業って――私が今ここにいるのはオフレコだから、今は就業時間に当たらないんだけど」
「だったら僕の仕事の邪魔をしないでくれ。だいたい、竜がいないとなったらさっさと帰るんじゃなかったのか？」
「いや、一人で帰ると余計に疲れるかな、と」
「…言っとくけど、僕らも帰りは歩きだぞ？　転移魔法なんて使わないぞ？」
「それに、もう緊張感持つほどの仕事は残ってないでしょ」
　レギンの潜入班にくっついて城の中を上へ上へと登ってきたが、ここまで敵の迎撃も無く、罠を張られていることも無かった。犯人は私達に追い立てられて上へ逃げ続けているのか、それともどこかに隠れているのか――「他の道も、もう全部潰したんでしょ？」
「…ああ。ここ以外の塔も部下が調べたし、見張りも立ててある。隠れている者もいなかったし、逃げ出すことも不可能なはずだ」
「転移魔法で脱出した可能性は？」
「そうならないように、あらかじめ周囲に障壁を張らせてる。転移で出ようとすればどこかで引っかかり、その場で取り押さえられる」
「敵が実力で突破したとしたら？」
「障壁が破られたとか、乱れたとかいう報告は無い。たぶんまだ何も起きてないよ」
「…そう」
　応えて、わたしはぼそりと呟く。「つまんないの」
「神弥卿」
「わかってるわよ。――要は、ここにいるはずだってことでしょ？」
　言って上を見やる。私達の前には階段が一つある。この城で最後の階段。最上階のさらに上、屋上へと続く階段だ。登りきったところにはドアが一つ。それを開ければもう外の空気が吸える。

「理屈でいけば、そうなるな」
「そうならないかもしれない？」
「君はそう思うのか？」
「いや、あんたがそう思ってるんじゃないかと思って」
「…」
「…？」
そこで妙な間が開いた。「そろそろ行こう。僕がドアを開ける。先頭はマシューとソーニャ。先頭の者は障壁を張りつつ周囲を警戒。後の者は攻撃準備を整えて二人の後方に展開。いつでも撃てるようにしておけ」
「了解」
周囲から静かに返事が返ってくる。魔導師達が移動し、隊列を整える。「神弥卿と春日さんは最後尾に」
「えー」
「春日さん、ウチの要員は全員仕事がある。神弥卿を守れるのは君だけだ。頼む」
「了解です、閣下」
「無視か」
私のボケもツッコミも完全無視し、レギンは正面に向き直った。
「総員攻撃準備とともに微速前進。先頭が六段目まで上がったらドアを開ける。合図するから突入しろ。マシュー、ソーニャ、頼むぞ」
「「了解」」
二つ返事が返ってきて、魔導師達がゆっくりと歩き出す。何事かぼそぼそと呟いているのは、攻撃魔法の詠唱だろうか。
「行くぞ！」
レギンが言い、腕を振る。轟音と共に風が荒れ狂い、収束し、刃となってドアを斬り飛ばした。二人を先頭に魔導師達が屋上に踏み込む。「――！？」「れ、レギン様！」先頭の二人が叫ぶ。
「どうした！？」
訊き返しながら、レギンも階段を駆け上がる。私と小衣もそれに

続く。
「「――！」」
いた。
どこかに隠れるでも、屋上の端でどう逃げようか思案するでもなく、そいつは私達の目の前にいた。
夜空に溶け込む暗紫系迷彩。人型の上半身に武器コンテナとＣＳＢＣ―《多連姿勢制御バーニア群》を兼ねた蛇の下半身。両肩には全ての竜の中でも最高の推進力と空戦機動力を生み出すＦＢＰ―《可動式バーニアポッド》。頭部には三つの眼が縦に並んでいる。中距離広角レンズと遠距離望遠レンズ。そして一番上に装備されている第三の眼は――
「来るぞ！　防御しろ！」
「駄目！　伏せて！」
口では言うが、レギンを助けている暇は無かった。「きゃ！？」すぐ脇にいた小衣を押し倒すようにして伏せる。「あ――！？」「く――！」レギンや魔導師達の、面食らったような悲鳴が聞こえる。死人は出てないはずだ。第三の眼はヴィーヴルの『砲《ブレス》』。しかしそれは攻撃用ではない。巨大な光を発生させて、敵の眼を潰す光撃器。
死人が出るとすれば――この次の瞬間。
「――！」
顔を上げた私は、すでにヴィーヴルが攻撃態勢に入っているのを見た。腕を高く掲げ、手刀を振り下ろそうとしている。後ろに逃げる？　駄目だ。中に入ったら建物ごと殺られる。横に逃げる？　駄目だ。きっとあの手刀は床まで割るだろう。逃げ切れるかどうか分からない。前に逃げる？　駄
考えている間に、ヴィーヴルの手刀が殺意を帯び、揺れた。「…！」身体は動くが、動けない。どうすればいい？　どうすれば
降ってくる。「…！？」死を意識した時、悲鳴のような金属音が聞こえ、ヴィーヴルが仰け反るのが見えた。一瞬状況が理解でき

ない。
遠くに何かが落ちる音が聞こえ、そちらを反射的に見やった時、
「――！」何か言うより先に身体が動いた。
「小衣！」
倒れている小衣に駆け寄り、抱き起こす。「何て無茶を！」「いや、防御魔法かけてたんですけど……肩やっちゃいました」顔を歪めながらも、笑う。この子の魔法の腕がどれほどか知らないが、たぶん死ぬほど痛かったはずだ。暴走するトレーラーに突っ込んだようなものだ。抱き起こした手がぬるぬるする。小衣の血なのだろうか。それはあっという間に私の二の腕まで侵食する。やっちゃったなんて小衣は軽く言うけど、たぶん肩が外れたんじゃない。砕けたんだ。
小衣が死んでしまう――それだけが頭に浮かんだ。怒りも恐怖も浮かばなかった。「小衣」
「私と貴女以外はみんな目をやられてる。これじゃ勝負にならない。私があいつを城から引きはがすから、皆と一緒に撤退して」
「…」
「――小衣！　聞いてる！？」
「……は、い…」
応え、立とうとする。――立とうとすることしかできないようだった。
そこでようやく怒りを感じた。――誰に対する怒りだったんだろう？「レギン！」
「全員を撤退させて！　こいつは私が殺る！」
「…」
「レギン！」
急激に増大していく怒りを抑えられず、レギンに叫ぶ。しかしレギンは動かなかった。棒立ちだった。目をしっかり見開いているところを見ると、目をやられたわけではないのだろうに。
「――役立たず！」

吐き棄て、私は小衣を抱き起こした。「――殺してやる！」竜石を握る。

†

「愚かね」

女のような声が、半人半蛇の竜から聞こえた。「この竜の装備はよく知っているはずなのに、どうして夜中に来るのかしら？　レギンがそうするのはまあ仕方ないけど、貴女までそうだとつまらないわ。神弥朝ってこんなものなの？」

「…小衣」

私は小衣をシートの後ろに座らせ、ハーネスの一本と私のマントで頭と身体を固定した。「すぐ終わらせるからね。ちょっと揺れるけど我慢してね」

「…」

小衣が微かに頷いた気がして、泣きそうになった。「まあいいわ。始めましょうよ。貴女を倒せば、私は地上でただ一人の、本物の竜の所有者となれる。しかも、貴女を倒すのはすごく簡単。だって貴女のタラスクスは飛べなくて、私のヴィーヴルは飛べるんですもの」

何か言うと本当に泣きそうだったので、無言でシートに座る。

「…ねえ？　聞いてる？」

聞くか糞アマ。

私はタラスクスを加速させ、ヴィーヴルに体当たりをかけた。

「え！？」咄嗟にヴィーヴルは身をかわすが、その時にはタラスクスの右第一腕が、ウェポン・ラックの一番に手をかけていた。「きゃ！」抜刀。刃が閃き、しかしヴィーブルはその刃をすんでのところでかわす。タラスクスは逆の拳でヴィーヴルに殴りかかり、ヴィーヴルはそれを両腕を交差させて受け止める。

「あ――！」

ヴィーヴルは屋上から落ちた。蛇の下半身で踏み止まろうとする

からだ。私はタラスクスを跳躍させる。頭に降ってきた刀身を、ヴィーヴルはすんでのところで受け止めた。
「くーー！」
「…本物の竜の所有者、ですって？」
両腕で刀を押し込みながら、左右の第二腕をヴィーヴルの首にかけた。「…！」ヴィーヴルの乗り手が息を呑んだのが分かる。「成程。確かにただ持つだけでも、出来るっていうのは凄いことよね。私に続いて竜石をモノにしたことは誉めてあげるわ。でも、貴女は本物の竜の所有者じゃない。だってこの程度の腕だもの。仮に使う竜が本物だとしても、貴女自身は本物じゃない」
「…！」
ヴィーヴルの首が軋む。首を失えば、ヴィーヴルは戦闘の要となる二つの目と『砲』を失う。ちなみにヴィーヴルの女は、その状況と私の言葉とどちらに息を呑んだのだろう。
「まあ、それは別にどっちでもいい。貴女が本物になりたければなればいいし、偽者でも私はいっこう構わない。でも、貴女のせいで今、私の友達が死にそうになってる。死ぬほど痛い思いをして、死ぬほど血を流してる。だから」
「バカね」
ヴィーヴルの眼が光を放ち、私から視界を奪う。同時に蛇の下半身をタラスクスに巻きつけ、そのまま後ろに転がった。マウントポジションが入れ替わり、ヴィーヴルが再び腕を高く掲げる。手刀が勢いをつけて降ってくる。
私は防御しなかった。そんなことをしたら敵に考える暇を与える。反撃のチャンスは今しかないのに。
「ええっ？」
タラスクスのクロスカウンターが、ヴィーヴルのこめかみに打ち込まれる。女の声は苦痛の呻きというよりも、ただ単に驚いただけに聞こえた。念のために左第二腕を敵の首に回し、引き寄せる。「え？　え？」頭突きを食らわせた。女が当惑した声をあげ、ヴィー

ヴルの機体から一瞬力が抜ける。立て続けに頭にダメージを受けて、システムが不具合を起こしたのだ。ひょっとしたらどれかの眼が潰せてるかもしれないが、そこまで期待はしない。「バカね」この隙に引き剥がしに来る――と考える敵のさらに裏をかく。私は脚のバーニアを全力噴射し、ヴィーヴルの頭を蹴りつけた。そのまま後ろに転がり、脱力したヴィーヴルの身体を引き剥がして立ち上がる。腹を蹴りつけて適当な位置に転がし、自分はそこから動かずに弓を構え、矢を番えた。ふらふら起き上がったところをぶち抜いてやる。ヴィーヴルの身体が蠢き、起き上がろうとする。さあ皆もこの間に考えて欲しい。お別れの言葉は何がいいだろう？

「ま、待って！」

「…」

「待ちましょう。待ちましょうよ。ね？」

「…」

待ってやる気も話す気も無かったので、とりあえず矢を引き絞る。

「あ、あくまでこっちの話は聞かないのね。後悔するわよ…」ヴィーヴルがゆっくりと起き上がる。

狙い澄まし、指を離した。悲鳴。ヴィーヴルの肩口に矢が突き立ち、ヴィーヴルは大きくバランスを崩す。矢が刺さったほうの腕を地面につこうとしたので、腕は力が入らず折れ、ヴィーヴルはまたしても地面に転がった。

「殺してもよかったんだけど、じゃあ一回だけ見逃してあげる。わたしが二本目を撃つ前に喋りなさい」

「…冗談じゃないわよ」

女の声にやっと憎悪が灯った。二射目を弓に番え、引き絞る。やっと敵が余裕を無くし、私と同じリングまで降りてきた。直接的な打撃戦で、最後にものを言うのは結局それだ。無理矢理にでも、ネジ込んででも相手を倒すという意思だ。遊び半分で戦ってる奴も、御託や綺麗事を並べてる奴も、最後の最後にはそれに気づく。本当に愉しいのはそこからだ。楽しもう。小衣の仇討ちだ。どうせ負け

ない。あの女に教えてやろう。お前なんかの付け焼刃の憎悪じゃ、私の心の底に溜まった真っ黒な澱は払えない。
「貴女は私には勝てないのよ。絶対に」
「へえ。そうなの？」
「いいえ、戦うことすら出来ない。貴女は何もすることが出来ず、ただ私に許しを請い、服従し、その命を差し出すしかないの」
「あっそ」
時間切れだ。「残念。時間切れよ」弓をヴィーヴルに向ける。限界まで引き絞った矢を持つ指から、力を抜く。
「これを見なさい」
突然、眼前――モニターよりも手前、私の目の前に、
司が現れた。「…え？」酷くやられていた。全身に打撲されたような傷があり、頭から流した血が俯いた顔に流れ、片腕が変な方向に曲がっていた。
「…え？　え？」
「まだ生きてるわよ。死なせたくなかったら降伏しなさい」
驚いた拍子に、思わずトリガーから指が外れた。「あ――！」矢が風を切ってヴィーヴルに襲い掛かる。
ヴィーヴルが消えた。「それでこそだ！　同胞！」別の声が聞こえた。腹に響き、私の心を殺意で揺さぶる、あの声。
激しい衝撃にコクピットが揺さぶられ、一瞬平衡感覚が無くなる。「小衣！」心配になって思わず叫んだ。タラスクスが転倒した。それはわかる。でもなんで？
考えている間に、また平衡感覚が無くなった。「…！」見たことも無い景色がモニターに映り、回転する。投げられた？　激しく流転する景色の中に一瞬見えた。両腕を二枚の翼に変形させ、大きく顎を開いた竜、幻翼竜ヴィーヴル。
そいつがその場でくるりとターンし、「！」もう一度衝撃。景色が別方向に回転し、身体がGに押し潰され、急に嘔吐感を覚えた。どうして？　いきなり動きが良くなった。

いや、そんなことより――！　「どうした？　同胞」
警告音。側方に敵機。「くそ――！」ＡＡＣＳＳ起動。バーニアを吹かし、回避しながら敵機を正面に捉える。夜空に浮かぶ黒竜が、殺意を持って翼を開く。黒い身体に牙だけが輝く。来る。「…！」ヴィーヴルが加速すると同時に、タラスクスも刀を構えた。ぎりぎりだ。間に合わないかもしれない。でも、間に合えば勝てる。祈った。何に？
「！？」
機体が突然重くなり、タラスクスは地面に叩きつけられた。弾け飛ぶ土がモニターを覆っていく。「――なめんな！」振り払い、立ち上がる。
再び警告が鳴った。ミサイル。「！」暗いはずの空が、光で覆われている。多過ぎる。避けるのも撃ち落とすのも無理だ。「…ふふ」開き直った。どうせ無理なものは無理だ。敵は――大丈夫だ。捕捉出来ている。刀を仕舞い、槍を構える。スロットル・レバーに手をかける。最大加速で上昇し、貫く。ミサイルの着弾率を最小限に落としながら反撃するにはそれしかない。それさえやれば勝てる。ただ問題は、中にいる人間がその加速に耐えられるかどうかだ。「…ごめんね、小衣」呟きながら、スロットルを限界まで引き込む。何がごめんねなんだろう。
――結局私は、嘘吐きだ。「行くよ…」がちゃり、と音がして、スロットルがさらに奥まで引き込まれた。リミッター解除。空の彼方にいる敵を見据える。
「――！？」
飛ぼうとして、機体のバランスが崩れた。地震だ。また？　こんな時に？
――まさか。「冗談でしょ！？」激しい地震が続く。ミサイルが着弾する。うるさく鳴り響く警告音の音階が変わり、驚くだけで何もしない私からタラスクスが機動制御を奪い取った。緊急回避。
タラスクスが回避した先で、地面が真っ二つに割れた。「…！

！」今度は驚くと同時に身体が動いた。操縦桿を握り、落ちていくタラスクスの姿勢を立て直す。左の第一、第二腕で土の壁に手をかけ、バーニアを全開にした。

上下から身体を押し潰されるような感覚が数秒続き――どうにか落下は止まった。「楽しんでもらえたかしら？」

ヴィーヴルが着地し、崖の上から私を見下ろす。「私が魔法を使える事は、どうやらお忘れだったようね、神弥卿？」

「…そういうこと…」

「タラスクス」

別の声が聞こえた。さっきの声だ。タラスクスを、同胞と呼んだ――「いや、タラスクスを使役する人間よ。お前のために先の戦争では、多くの同胞が失われた。我々にとっては、お前こそが憎き仇だ。我が同胞の亡骸を使役する寄生虫、病原菌め。殺すだけでは飽き足らんが、とりあえずは殺させてもらおう。死んで我が同胞に詫びよ」

「…ヴィーヴル」

機動制御をヴィーヴルに預け、自分は魔法攻撃に専念する。しかも使ってくる魔法が見事にヴィーヴルと連携を成している。誰にでもできる芸当じゃない。

でも――だからこそ、付け入る隙もあるはずだ。「ああ、そうそう」

「何だかうやむやになっちゃったけど、貴女の相棒の命は預かってるわ。さっきのはノーカウントにしてあげるけど、これ以上は抵抗しないで欲しいものね？」

――忘れていた怒りを思い出した。「殺したきゃ殺せば？」

「え？」

「貴女は別にそいつを殺したいわけじゃないわよね？　そいつの存在を利用して、有利に戦闘を進めたいだけ。でもいいよ。殺したくなったら殺しても。他の騎士だったら体面を気にして攻撃を躊躇ったかもしれないけど、私はそんなに甘くない」

「…な、何言ってるの？　貴女、彼の命が惜しくないの？」
「そいつの命まで何で私が面倒見なきゃいけないの？　そいつが今そこで死にかけてるのは全部そいつの責任でしょ？　私に黙っていなくなったと思ったら最悪のタイミングで出てきてさ。ふざけんじゃないわよ。何よそのザマ。あんた男でしょ？」
「ちょっと、落ち着いて話しましょうよ。あとちゃんと私に向かって話して」
「貴女に話は無い。消えろ」
　バーニアを吹かし、飛翔する。一瞬ヴィーヴルの姿がよぎり、それがすぐに視界の下に消える。タラスクスは空中で機体を捻り、槍をヴィーヴルに投擲した。
「バカね！」
　苛立たしげな女の声。ヴィーヴルは身体を一回転させ、槍を尾で打ち払う。そう。重量のある槍を空中から投げ落とされれば、それをヴィーヴルの細腕で防御するのは無理だ。回避が間に合わないとしたら、あとはその自慢の尾で打ち返すしかない。そこに一瞬の隙が生まれる。身体を一回転させたその一瞬、ヴィーヴルは私に背を向ける。
　右腕で槍を投げたタラスクスは、すでに左手に刀を準備していた。しかし、これを普通に投げてもヴィーヴルの回転のほうが速い。また打ち落とされるだけだ。投げるよりも速度のある攻撃をするしかない。最大加速。重力よりも速く重く、バーニアを全力噴射して突撃し、貫く。刀を構え、スロットルを思い切り引く。まだヴィーヴルはこちらを向いていない。今度は一瞬も迷っている時間は無い。外したら私が死ぬ。
　速度が私から視界を奪う。「っ！」モニターに額をぶつけ、一瞬気が遠くなる。手応えは無い。攻撃に移る一瞬前、別の力がタラスクスを地面に叩き落した。たぶん女の重力魔法だ。
「余計なことを！」
「言えた立場！？　止めを刺しなさい！」

ヴィーヴルが咆哮する。タラスクスの顔を上げさせると、モニターに踊りかかってくるヴィーヴルが映った。
もう、「遅い！」こちらの攻撃準備は完了しているのだ。今から攻撃にかかったって遅すぎる。
スロットルを一気に押した。同時にトリガー。
「「っ！？」」
「っ！」
タラスクスが低空を飛翔し、ヴィーヴルを横一文字に斬りつけた。手応えあり。速度も充分。私は胃の中身が逆流するのを感じながら、口の端を吊り上げて笑った。きっと醜い顔をしているに違いない。戦う女性は美しい？　嘘だよそんなの。
脚とバーニアを細かく操作して急制動をかけ、着地する。速度を殺しきれず、タラスクスは土を蹴立てて地面を滑る。脚が馬鹿になってるので私はさらにバーニアを使い、タラスクスを１８０度ターンさせた。「まだよ、」私！　自分を叱咤し、こみ上げてきたものを飲み込み、視界に敵を探す。まだ止めを刺してない。
――いた。長い尾の半分を失い、空中で錐揉みしている。遅れて女の悲鳴が聞こえた。刀を第二腕に持ち替え、弓矢を構える。照星が敵を追い、タラスクスが限界まで矢を引き絞る。タラスクスの滑る速度が落ち、ヴィーヴルが錐揉みしながら地面に落ちていく。お互いの速度が限りなく零に近づいた瞬間、照星がヴィーヴルを捉え、甲高い声で私に攻撃を促した。もう何が起きても外さない。
「待ってくれ！」
「！？」
視界に――モニターよりも手前、私の目の前に、
今度はレギンが現れた。「あ！」驚いた拍子に思わずトリガーから指が離れる。
ギィン！　と、遠くに甲高い金属音が聞こえた。どうなったんだろう？　レギンが邪魔でモニターが見えない。当たった？　それとも「待ってくれ、神弥卿！」

「そこどいてレギン！　仕事中！」
「頼む！　あの竜を壊したいならそれでいい！　でも、中の人間は殺さないでくれ！」
「どいてってば！」
レギンを無理矢理どかし、モニターに目を凝らす。――触れるということは、どうやら映像とかではなく、本人らしい。
ヴィーヴルは、大体予想通りの位置に横たわっていた。問題は倒したかどうかだ。「…！」微動している。尾の半分を失ってバランスが悪いようだが、立ち上がろうとしている。外した？　そんな「！」防御魔法。畜生。最悪だ。折角ここまで追い詰めたのに、最後の最後でまた魔法でかわされた。どうしよう。もう一度同じことをして追い詰める？　私の体力がもつだろうか。せめてヴィーヴル一匹なら、あの魔法さえなければどうにかなるのに。
――あの術者さえいなければ――「聞いてくれ、神弥卿！」
「黙ってよ今考えてるんだから！　だいたいそんなの約束できない！」
「彼女は、僕の姉さんなんだ！」
「…」
一瞬、時が止まった。――違う。止まってたのは私だ。「はい？」
「彼女は――カルティア・リベリス・レギンは、僕の姉さんなんだ」
「…はい？」
意味が分からなくて、私は同じフレーズを繰り返す。「ククク……カルティア。我が主よ」ヴィーヴルの苦しげな、でも愉しげな笑いが聞こえる。
「どうやら弟君がご到着のようだ――役者が揃ったな」
「そうね。いよいよ負けられないわ」
「もうやめろ！　姉さん！」
レギンが叫ぶ。「その竜はもう死に体だ！　これ以上続けても結果は見えてる！　降伏してくれ！」
「あんたにはどんな結果が見えてるのかしら、アレク？　たぶんあ

んたが見てるものは、あんたの願望よ」
「違う！　僕はそんなつもりじゃ」
「だってそうでしょ？　あんたは本当は私が邪魔だった。私さえいなければ、あんたはもっと楽にレギンの家督を継げたんだものね。憧れの騎士になった気分はどう、アレク坊や？　私が言った通り、そう大したものでもなかったでしょ？」
「姉さん！」
「私の言っていることが本当かどうか、そこの勇者様に訊いてごらんなさいよ。確かに私のヴィーヴルは決して小さくないダメージを負っている。対するタラスクスの方は消耗こそあれ、ヴィーヴルに比べればほぼ無傷と言ってもいい。――でも、中の人間はどうかしら？　外見は若く見えても、神弥卿はもう百歳を超えるお婆ちゃん。さっきみたいな高速戦闘で、その身体には何のダメージも無かったのかしら？」
「――」
「…」
レギンが私を見る。私は一瞬だけレギンを睨み、また正面に視線を戻した。またこみ上げてきた吐き気を無理に飲み込む。ほんとは一回吐げたほうがいいんだけど、さすがにレギンの前でそれは嫌だ。
限界が近い。何か考えなければならない。私の体力が完全に尽きる前に。「…答える気力も残ってないようだから、そろそろお終いにしましょうか？」
「…ただで終わってあげるほど甘くないよ」
「あら、まだ生きてたの？」
「待ってくれ、神弥卿」
「何よ」
訊き返し、振り向く。レギンも私を見る。近い。まあコクピットが狭いだけだけど。「肉親だから助けるわけじゃない。彼女は必ず捕らえ、正当な裁きを受けてもらう。だから、殺さないでくれ」
「…」

方法1。レギンと取引して協力させる。彼女もおそらくレギンと同じかそれ以上の術者だが、全く歯が立たないわけじゃないだろう。レギンがカルティアを抑えてくれれば、ヴィーヴルを落とすのは格段に楽になる。

――でも。「わかった、レギン」

「彼女は殺さない。殺さないように努力する」

「――本当に？」

「一個頼まれれてくれれば」

「――？」

「後ろに怪我人がいるから、その子を連れて先に帰って。ここは私がやる」

「…君一人で？　それでいいのか？」

「誰だと思ってんの」

「…」

「早く行って。敵が来る」

「…わかった」

レギンが後ろに回る。「武運を祈るよ、神弥卿」「あいつに？」

「何？」「…ごめん。こっちの話」「…独り言が多いのが君の欠点だな」「うっさい。早く行け」私が言い返す間にレギンが小さく詠唱し、消えた。「…ごめん」消えた後で謝った。皆も。もし今ので私のことを見直してくれた人がいたら、それは早めに撤回してほしい。「ちょっとちょっと、神弥卿」

「何やってんの。せっかく主役が舞台に上がってくれたのに、帰しちゃってどうするのよ」

言ってる間に踏み込んだ。全腕攻撃準備。第一腕に短剣と斧、第二腕に刀と槍を構える。ギアをDからOTへ。腕部動力制御弁一番から四番を解放。タラスクスの四つの腕が、封じられていた力を得て鳴動する。上半身で急激に余剰エネルギーが生まれ、タラスクスの口腔を通り、咆哮となって外に出た。

体当たりするようにヴィーヴルに近づき、短剣を繰り出した。

「――ひ！？」惜しい。寸前でヴィーヴルにかわされる。斧を持つ腕を引きつつ一回転。「何！？」左第二椀の刀の柄頭でこめかみを打たれ、今度はヴィーヴルが驚いた。バランスが崩れたヴィーヴルに右第二腕の槍を突き下ろす。ヴィーヴルは錐揉みするように横に跳んでかわし、

轟音を残し、消えた。「…」バーニアを全力噴射して上空に逃げた。レーダーを見る。――直上にいる。しかし高度的に、弓は届かないだろう。

「――なぜ」

しばしの静寂の後、女の声が聞こえた。「なぜ、逃げるの。ヴィーヴル」

「…お前こそ、自慢の魔法で何とかしたらどうだ」

「どっちでもいいよ」

「「――」」

一人と一匹が黙り込んだ。「カルティア公女」

「私は降伏しろとは言わない。逃げなさい」

「――え？」

「竜同士の通信は外の人間には聞こえない。図らずもだけど、私はレギンに貴女を殺さないと約束した。でも、たぶん貴女は私に勝てない。だから――その竜を置いてどこかに消えるなら、私は追わない。レギンには私が取り逃がしたことにして謝罪しておく」

「ば――馬鹿にして」

「馬鹿にされてもしょうがないことやってんのは自分でしょ。何があったか知らないけど、実の弟逆恨みしてバッカみたい。挙句癇癪起こして他人に迷惑かけてさ。もういいからいなくなれ。私の目の前からいなくなれ。どこか誰も知らないところに行って、一生そこから出てくるな」

「…！」

「じゃあ私もう帰るね。疲れたし。帰って寝よ」

全武装を収納し、背を向けた。歩き出す。

「――ふざけるな！」
カルティアが叫んだ。警報より速く腕が動く。振り返ったタラスクスの視界に、大きく顎を開いて急降下してくるヴィーヴルが映った。「止めろ、タラスクス！」呟き、全力運転待機で待ち構えた。倒れるな。絶対に転ぶな。立っていなければ意味が無い。
衝撃。ヴィーヴルの顎がガードしたタラスクスの左第一・第二椀に食い込む。瞬間タラスクスの全身をフル稼働させ、バーニアも使って衝撃を相殺した。噛まれた二本の腕がひしゃげ、潰れていく。私と彼女の運命が、この数瞬で決まる。もし私が倒れたら何もかも終わりだ。後は彼女が私を殺すか、私が彼女を殺すしかないだろう。
――でも、もし倒れなかったら。
「…！」
「…」
タラスクスは、倒れなかった。
腕がヴィーヴルの牙に砕かれ、しかし落下の衝撃は全て消え、静寂が戻った。「…そんな気概があるんなら」
「どうしてそれで弟を守ろうと思わないの」
「――」
「そりゃレギンはあれで全然気が利かないし、気障だし、あの営業スマイルだってどこまで本気か知れたもんじゃないわ。しかも私は家でのレギンなんか知らないし。もしかしたら貴女と一緒にいるときのレギンは、あの気障な顔してクソの役にも立たない穀潰しかもしれない。気が回りすぎて鼻につくかもしれない。――でも、いるといないとでどれほど違うか！　それが一人もいない世界で生きていくのがどんなに寂しくて寒いか！　あんた考えたことある！？」
「え、え――？」
「あんたは――あんたは、お姉ちゃんでしょうが！」
噛まれた腕を大きく伸ばし、引くと同時に逆の腕を繰り出す。
拳は噛まれた腕を破壊してヴィーヴルの頭部にめり込み、ヴィーヴルは大地に崩れ落ちた。「…」なんでこうなったんだろう――

とも一瞬思ったが、それよりも気になることがあった。
不思議だった。こんなことは初めてだ。
まだとどめを刺してもいないのに、このヴィーヴルという竜への憎しみは、幻のように消えていた。

†

本隊を警戒の名目で対岸に残し、賊の確保はごく限られた人員だけで行われた。
七騎士の一人であるフィスタすら、その場には立ち会わなかった。それどころか終わったと知るや手勢を連れてさっさと帰ったらしい。そのせいで小衣にお別れも言えなかった。畜生め。
――レギンに気を遣ったのかもしれない。
魔導師団の中でも特にレギンに近い数人が、慎重に警戒しながら、しかし犯罪者に対するとしては破格の丁重さで、彼女をヴィーヴルの残骸から連れ出した。
「…」
「…」
再会した姉弟は、しかし一言も交わさなかった。レギンは姉をじっと見つめるが、カルティアは弟を見ようとしない。「…いつか、どこかの時点から」レギンが呟くように言った。
「僕達は、ずっとこうだったのかもしれないな。いつからか、姉さんは僕をちゃんと見てくれなくなった」
「…自分は見ていたとでも？」
「…僕も、見えてなかったのかな。ちゃんと見てたつもりだったけど――もしそれが嘘や間違いだったとしたら、罪が重いのは僕のほうだ」
「…胸を張りなさい、アレク。あんたは何も悪くない」
「姉さん……残念だ」
「私はそうでもないわ。自分の実力が分かったから」

「…」
押し黙るレギンを尻目に、カルティアが私を見る。「…貴女が、神弥卿？」
「…初めまして、カルティア。初対面よね？」
「物心がついてからはね。二十年くらい前に来てくれたらしいじゃない？　生まれたばかりの私を見に」
「――ごめん。忘れたかも」
「もう歳ね、グランマ。――それにしても驚いたわ。私より年下に見えるじゃないの」
「見えりゃいいってもんでもないわ。中身が古臭いもの」
「そうね――でも、私よりはずっと魅力的よ。何しろ道を踏み外してないもの」
「――」
そうだろうか。――そんなわけない。
でも、少なくともカルティアには、今夜の私は「道を踏み外してない」ように見えたらしい。
自分でも珍しいと思う。――どうしてあんなことしたんだろう？
カルティアを乗せた馬車は、まだ明けきらない薄闇の中を、静かに去っていった。

†

「忘れてたな」
夜が明けてから、私は撤収準備中のレギンの本陣で軽い朝食をとり、町の宿からメイソンを呼び戻して帰路に着いた。
「忘れてたろ」
来るときは閉めていた馬車の窓を、私は何となく開けていた。別に深い意味は無い。ただ、一仕事終えた後の朝の空気は気持ちがいい。それだけだ。
「忘れたろ。え？　一応俺人質に取られてたんだが、途中からその

こと忘れたな？」
「何？　忘れたけど」
「…その倒置法は腹が立つな」
　私の隣の座席には、包帯まみれになった香禽司が窮屈そうに転がっている。レギンの部下の魔導師が治療してくれたので、大人しくしていればそのうち治るそうだ。少なくとも、前回入院した私よりは早いだろう。「あんたこそ」
「意識もあって口も利けたんなら、俺に構わずこいつをやれ、ぐらい言えなかったわけ？」
「誰が言うか。ていうかお前、俺がそう言ったら実行する気だったのか」
「言わなくてもやるよ。でも、言ってくれたら、泣きながらやる」
「ババアの嘘泣きなんざ要らねえよ」
「だいたいなんであんた途中でいなくなったの」
「…」
「…？」
「…よかれと思って」
「…ぷっ」
　思わず吹き出した。何か企んでたらしい。どうせろくなことじゃないんだろう。「笑うんじゃねえよ」
「笑うわそんなもん」
「…お前こそ」
「ん？」
「説教ベタのくせに、最後えらそうに説教たれてたな」
「…そうだっけ」
「とぼけるな。ガラにも無く感情的になりやがって」
「なってないよ。アレは作戦」
「そうだな。確かに作戦としては間違ってなかった。残り少ない体力をできるだけ使わずに敵を捕捉するには、自分ではなく敵を動かしてカウンターを狙うしかない。それは合ってる。――ただ、台詞

には明らかに感情がこもってたな」
「演技よ演技」
「なんでそうなったのか、お前自身分かってねえんだろ」
「…」
私は窓外へ視線を映す。視界の外で、司が笑うのが聞こえた。「なんでそうなったのか説明してやろうか。お前は嫉妬してたんだよ。姉貴が生きてるレギンと、弟がいるカルティアにな。今度の事件はフタ開けてみれば、あの二人の壮大な姉弟ゲンカだ。あいつらがお互いを想えば想うほど、お前は自分が惨めになった。何も無い自分と、それを竜の生き血で埋めようとしてる自分がな。そのせいさ。あいつらが姉弟ゲンカを始めたあたりで、やる気が失せてしち面倒くさい戦術を放棄した」
「……」
――そうなのだろうか。そうかも知れない。違うとは言い切れない。
でも、だとしたら、今私が感じているこの爽快感は何なんだろう。
ヴィーヴルも完全に倒したわけじゃない。カルティアを殺したわけでもない。ママが生き返るわけでもない。
何も変わっていないのに、私の心はどこか、ここに来る前と違っている――「…あ」
「…何だよ」
「ううん。何でもない」
「…？」
「あんた、ヴィーヴルの死骸どうする気？」
「どうするも何も、倒したのはお前だろ。その貸しと竜機兵製造規制法を使ってふんだくるさ。――それがどうした？」
「ちゃんとやりなさいよ。あんたの大事な飯の種なんだから」
「…ああ？」
司の怪訝そうな声を尻目に、私は窓枠に肘を突いた。昇ってくる

朝日が、少しづつ町を照らしていく。早起きな町人が起き出して、私の馬車とすれ違っていく。「かみやさまー、こんにちわー」
「…」
これから学校に行くらしい子供に、無言で手を振る。「…司」「…どうした」
「カルティア、死刑かな」
「…さあな。俺はレギン公国の刑法は知らんから、調べなきゃ何とも言えん」
「…あっそ」
もし生きてたら、手紙を書こうと思う。
私は初めてだったのだ。人間と戦うのは。

?．もしあなたが「誰かに自分の話を聞いて欲しい」と思ったら（後書き）

というわけで第二話Ｂパートです。
君達に、捕捉情報を公開しよう！　フィスタのフルネームはフィスタ・アーシア・ヴォーディガンです。――いや、特に意味はありません。今さらになって可哀相になったので。
次回は朝の自慢の部下達、神弥竜機師団一同が登場です。――というか、そんなの問題にならないほどの大事件が起こります。
ご期待ください――というかもうやってます。ご検索ください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8787p/

タラスクス〜朝の病名〜?‐２

2011年1月9日07時37分発行